

国際バカロレアの教育システム分析  
ーコンピテンスの育成プロセスに着目してー

[学位請求論文概要書]

御手洗 明佳

## 本論文の目的

本研究は、グローバルスタンダードと称される教育プログラムである国際バカロレア (International Baccalaureate、略称を IB とする。) に焦点を当て、教育目標・教育内容・教育方法・教育評価の 4 つの分析軸からこれらの有機的関連性を分析し、IB 教育プログラムの構造的特徴を明らかにすることを目的とする。後期中等教育段階の 2 年間で IB 教育プログラムの一定要件を満たすと、「国際バカロレアディプロマ資格」という国際的な学歴が付与される。この教育プログラム及び資格は、様々なインターナショナルスクールにおいて提供されており、その取得者は増加傾向にある。その背景には、アメリカ合衆国などの国家内部のエリート校が、この資格を国際的な教育水準の高さの証として意味付け、取得を勧めていることや、韓国などのグローバル化を推進する国によって海外の多国籍企業を誘致するため、そこで働く従業員が師弟を通わせるためのインターナショナルスクールの新設を自治体によって奨励されていることが挙げられる (Lauder Brown, Dillabough Halsey, 2006, pp.65-66)。

これまでの教育プログラム及び資格は、いわゆる国民養成を目的とした国家内部に閉じられたものであったのに対し、IB 教育プログラム及び資格は、国際通用性をその特性としている。すなわち、第一に、歴史的・文化的文脈に捉われない国境を越える教育であること、第二に、学修成果の国際的通用性をもつことである。この二点の特性について、資格の国際通用性という点では論じられることが多い一方で、どのような教育プログラムとして提供し、その結果、どのように学習成果を保証しているのか、さらに、各国に点在する国際バカロレア全体の運営はどのようにされているのかについて、教育システムとして一連つながりを持って分析した研究はのちに述べるように、管見の限り確認されていない。よって、本研究では、国際的な教育プログラムの特性について、教育プログラムは教育目標・教育内容・教育方法・教育評価の 4 点から分析し、さらに教育システム全体の運営については、特に国際バカロレア認定校と教員養成の質保証に注目し明らかにすることを目指す。

## 本論文の構成

本論文では、コンピテンス・ベース型カリキュラムとして国際バカロレア教育プログラ

ムを調査対象とした。これまでの国際バカロレアに関する先行研究が、(1) 国際バカロレアについて・カリキュラム構成に関する研究、(2) 国際バカロレアの教科内・外の教育実践、(3) 国際バカロレアの学習成果・大学入学資格としての活用、のいずれか、または、これらの組み合わせによりおこなわれていた。本研究が目指す、コンピテンスを涵養するためのカリキュラムの構造的特徴とその後の成果、および、教育システムとの関連性を明らかにするためには、これらを一つの関連し合う要素として捉える必要がある。

この教育プログラムを分析し各要素の関連を明らかにするために、第一に、国際バカロレアの教育カリキュラムを教育目標・教育内容・教育方法・教育評価の4側面から分析し、国際バカロレアが目指すコンピテンス涵養のため、どのような教育システムを構築しているのか、その構造的と特徴を明らかにすること、第二に、その4側面がどのようにカリキュラムとしての関連性を保ちながら、目標管理型システムとして学習成果に関する「質保証」を行っているのか、教員研修の側面にも注目しながら明らかにすることの2点を本研究の課題として設定する。本研究では、学習成果との関連もみるため、大学入学資格として研究蓄積を持つ、ディプロマプログラムに焦点を当てた。

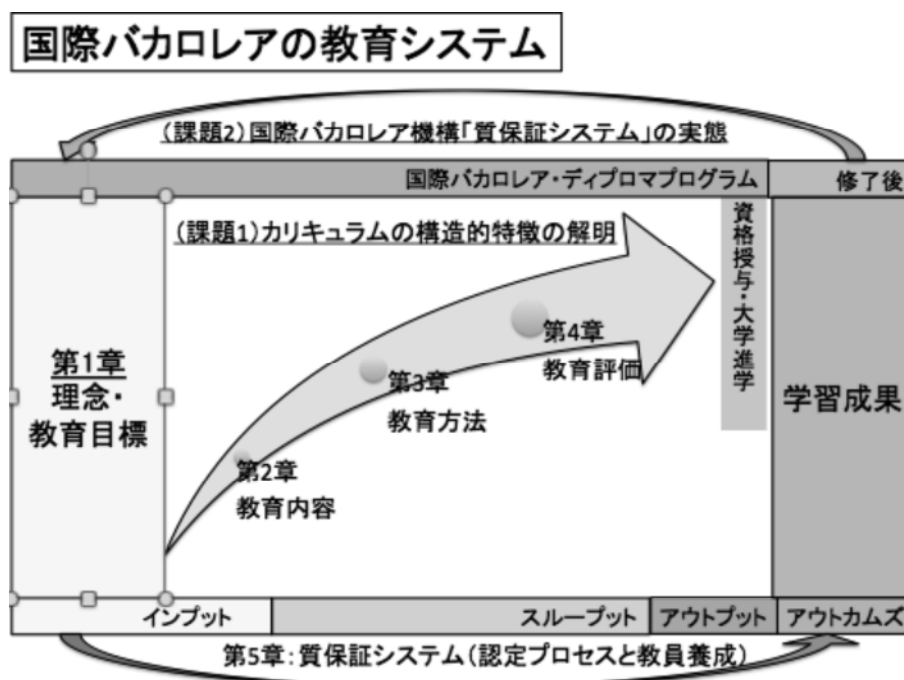


図1 分析の枠組み

## 各章の概要

第1章では、国際バカロレア教育プログラムを分析するうえで軸となる「コンピテンス」

を教育目標から分析的に抽出し可視化した。国際バカロレアの教育目標「IBの学習者像 (IB Learner Profile)」を日本で提唱される「学力の新三階層」、すなわち、①習得すべき内容、②活用するための能力、③探究的な態度の点から分析した。その結果、「①習得すべき内容」に関する項目は全部で11項目抽出された。その項目とは「(1) 地域の重大な問題に関すること、(2) 地球規模の問題に関すること、(3) 幅広い学問分野に関すること、(4) 複雑な問題や不確実な事態に関すること、(5) 考え方や情報に関すること、(6) 人間が持つ権利と尊厳に関すること、(7) 自国(自分)の文化や歴史に関すること、(8) 他の地域社会(他者)の伝統・価値観・視点(ものの見方)に関すること、(9) 新しい方策、考え、役割に関すること、(10) 知・情・体の大切さに関すること、(11) 自己理解に関することである、である。これら項目「習得すべき内容」の特徴として、キー・コンピテンシー (OECD, 2006) が定義する3点、すなわち、「個人や社会との相互関係」、「自己と他者との相互関係」、「個人の自律的と主体性」との類似性があることを指摘した。

「②活用するための能力」に関する項目として全部で11項目を確認した。具体的には、(1) 探究・調査能力、(2) 自己学習能力、(3) 思考力、(4) 批判的思考力、(5) 創造的思考力、(6) 論理的決断力、(7) コミュニケーション能力、(8) 共同学習能力、(9) 創造的表現力、(10) 発信力、(11) 評価能力である。これらの項目を分類すると、研究に関する能力(特に、1、6、9、10)、(2) 自己マネジメント能力(特に、2、6、11)、(3) 思考に関する能力(特に、3、4、5、6)、(4) コミュニケーションに関する能力(特に、7、9)、(5) 社会性に関する能力(特に、8、10)の5つの能力要素があることを指摘した。これらの活用能力に関する詳細な分析は「第3章 教育方法」にて言及をおこなう。

最後に「③探究的な態度」に関する文言を「IBの学習者像」から抽出した結果、19項目が検出された。それは、(1) 好奇心、(2) 学習を積極的に楽しむ、(3) 理性的、(4) 主体性、(5) 協力的、(6) 誠実性、(7) 正直さ、(8) 公正性、(9) 正義感、(10) 責任感、(11) オープンマインド、(12) 経験重視、(13) 思いやり、(14) 共感、(15) 尊重の精神、(16) 勇気、(17) 気構え、(18) 自立的な精神、(19) 反省性(振り返り)であった。これらの「探究的な態度」に関わると思われる項目は、「IBの学習者」該当番号の前半(1~5)で抽出された項目と後半で抽出された項目を類別すると、前半部分(1~5)は、(1)~(10)であり、その特徴を「探求学習をおこなうために必要な態度」とまとめた。後半部分(6~10)で抽出された項目は、(11)~(19)であり、その特徴を「他者と関わるために必要な態度」とした。

以上、国際バカロレアの教育目標から検出されたコンピテンスとは、「①習得すべき内容」として 3 分類 11 項目の「自己・社会等の相互作用関係や自己の主体性に関する概念の習得」、「②活用するための能力」として、5 分類 11 項目の「習得すべき内容を深く理解するための能力」、「③探究的な態度」として、10 項目の「探求学習をおこなうために必要な態度」と 9 項目の「他者と関わるために必要な態度」であった。これらコンピテンスは、国際バカロレア理念である「IB の使命」の「教育プログラムの役割」の 4 項目との関連性を確認した。すなわち、図 2 に示すように、「①多様性への理解」は、「自己・社会等相互作用関係や自己の主体性に関わる概念の習得」に、「②価値の多様性に対する深い理解」は、「習得すべき内容を深く理解するために必要な能力」、「③共感する心を育む」は、「他者と関わるために必要な態度」、「④生涯にわたって学び続ける態度の推進」である。この結果から、国際バカロレア機構全体の理念と教育プログラムの目標の繋がりに関連性を指摘した。

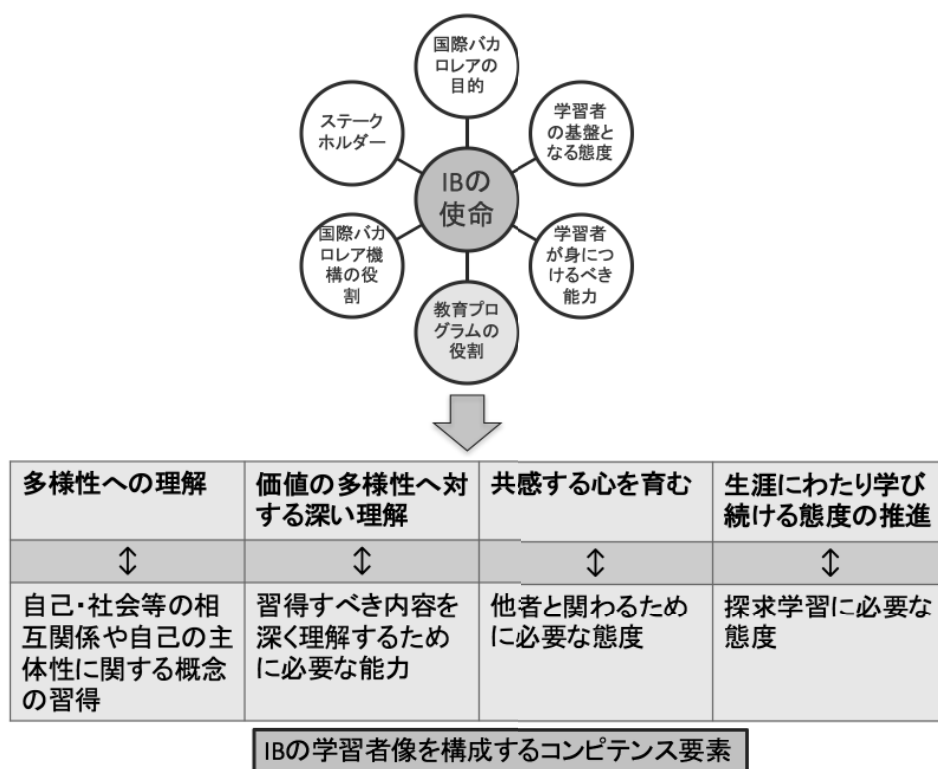


図 2 理念と教育目標の関係とコンピテンス要素

第 2 章では、第 1 章で可視化したコンピテンスを分析軸として、ディプロマプログラムの教育内容の特徴の解明を目指した。第 1 節では、国際バカロレアが提唱する教科学習と学際的学習の融合と学習者中心の理念に関して概観し、その理論とコンピテンスの関係性

について分析をおこなった。その結果、教育内容である「グローバルな文脈」（「多言語主義と多様な文化の理解」、「世界との関わり」）と、コンピテンス「習得すべき内容」との間に共通性が確認された。そもそも「グローバルな文脈」とは、教科学習と学際的学習の両方を目指す国際バカロレアにとって、教科で学んだ教育内容を実生活（特にグローバルな環境）の文脈に適用するために定義している。すなわち、可視化した基礎コンピテンスの「習得すべき内容」とは、教員が伝達すべき「教育内容」というよりは、教科学習を「グローバルな文脈」のトピック上で学習することを目指すものであった。これらのトピックの特徴は、基礎コンピテンス同様に、「個人や社会との相互関係」、「自己と他者との相互関係」、「個人の自律的と主体性」の3つに分類できる点である。

第2節では、必要性が叫ばれる「コンピテンス」のそもそも性質と階層性について概観した。該当文献を整理した結果、コンピテンスは、①動的でありレベルが存在すること、またコンピテンスは単体としては存在せず、測定できないが、②複数に渡る同レベルのコンピテンスを確認することによって、その人がどの程度のレベルにあるか知ることができることを確認した。すなわち、コンピテンス・ベース型カリキュラムでは、従来のような、覚えた知識の確認ではなく、生徒の行動（パフォーマンス）を通じて複数のコンピテンスを確認するという方法のみによって可能であることを確認した。よって、評価も行動的局面を「認知領域」「情意領域」「精神運動領域」の三領域で構成する「改訂版ブルーム・タキソノミー」などが適している。

こうした理解をもとに、第3節では、ディプロマプログラムにどのように、コンピテンスの内容が含まれているのかの分析をおこなった。「IB 文学」のテキストを分析した結果、教科の教育内容として言語と文学の専門的教科内容と、教育プログラムを達成するために重要な試験と評価に関する教育内容が含まれていた。具体的には、「言語（コミュニケーション、読み方、書き方）について」、「文学（文学的表現技法、ジャンル、形式）について」、「試験（構成、書き方、話し方）について」、「評価について」の4項目である。これらの教育内容は、教科学習としてその教科独自の内容とその他の教科と共通性を持つ内容の両方を含む内容となっている。例えば、「試験について」や「評価について」は、学問的学習をする上で不可欠となる「アカデミック・スキル」や「評価方法（振り返り）」を含む内容であり、その他の教科とも共通する点である。以上の分析結果から、国際バカロレアの教育内容とは、教科とその他教科、教科学習と学際的学習、学際的学習と「グローバルな文脈」への適応といった、異なる概念の「分析・統合・評価」について習得することを

目指していることを指摘した。

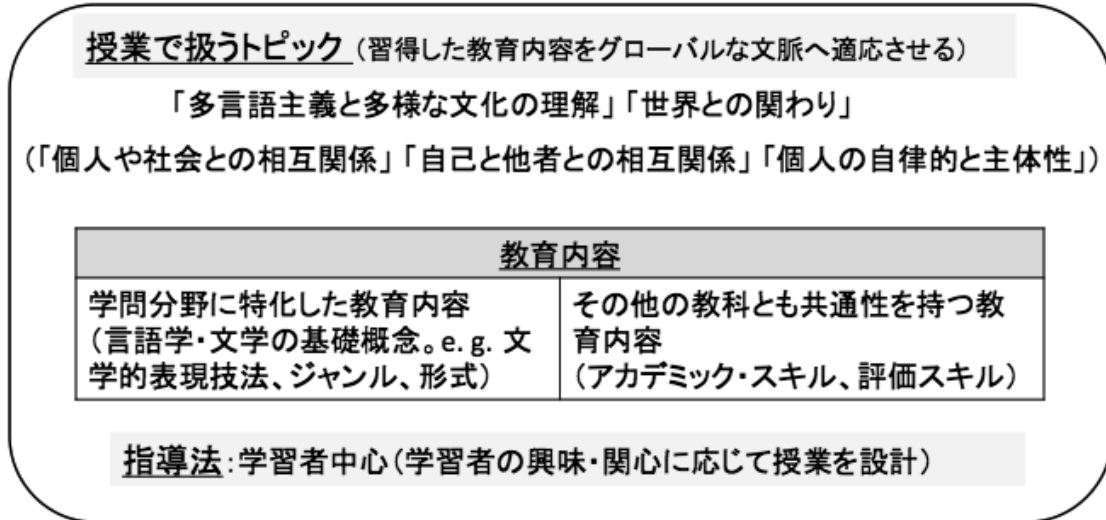


図3 教科学習と学際的学習を融合した教育内容

第3章では、国際バカロレアの教育方法の特徴を解明するため、第1章で可視化したコンピテンスについて、教育方法との関わりに注目して分析をおこなった。方法として、教育プログラムモデル図にも位置付けられ、教育方法を理解する上でキーワードとなる「学習の方法 (Approaches To Learning: ATL)」と「指導の方法 (Approaches To Teaching)」の理論と基礎コンピテンスの関係の分析と、試験問題の分析と教育現場での教員らの教育方法に関するインタビューから得られた情報に関する分析をおこなった。第2章で確認したように、国際バカロレアの教育の中心には、「学習者中心」の理論が貫徹している。それを基礎としたうえで、ATLでは、教員が生徒に身につけるべき能力として「思考力、コミュニケーション能力、ソーシャルスキル、自己マネジメント力、リサーチ力」の5つが設定され実践への活用を推奨している。教育実践における教員の役割とは、生徒個々人の状況に合わせて、第2章で明らかにした教育内容、ALTのスキルを繋ぎ合わせて設計する点にあり、そこでは教師の専門性に授業が委ねられていた。さらに教科担当教員は、単一授業のみではなく、2年間のディプロマプログラムコースの教育内容 (範囲)・スキル (順序性) のマネジメントも行っており、それらは各教員の裁量によって実施されていることを教育方法の特色の一つとして指摘した。教育方法に関する教員インタビューの結果から、国際バカロレアで求められる学習成果に到達させること同時に、生徒一人ひとりの興味・

関心にあった内容や方法を見つけ出すことに苦心していた様子が確認されたこと、さらに、スキルの獲得については、生徒のレベルや得手・不得手に応じて、学習の順序や方法、問い方を柔軟にマネジメントしている様子が確認された。また、カリキュラムの理論では、ALT のスキルの上位スキルとして、「クリティカル・シンキング」、「体系的探求」、「メタ認知」が位置付けられており（図4参照）、カリキュラムのコアで中心的に身につけるスキルとされている。同時に各教科でもコア「TOK」科目とのつながりを意識しつつ、上位のスキル獲得が期待されているが、調査結果から、教員らは、各教科とコア科目との接続や、上位のスキルの教育方法に関しては高度であり、深い認識ができていないことが確認された。以上の分析を踏まえ、教育目標から検出された「活用するための能力」とは、教育の方法・学習の方法と強い関連性を持つこと、教育プログラムとして身につける能力として、各教科・コアの実践に、教員のカリキュラムマネジメントによって、位置付け、意義付けられていることを指摘した。

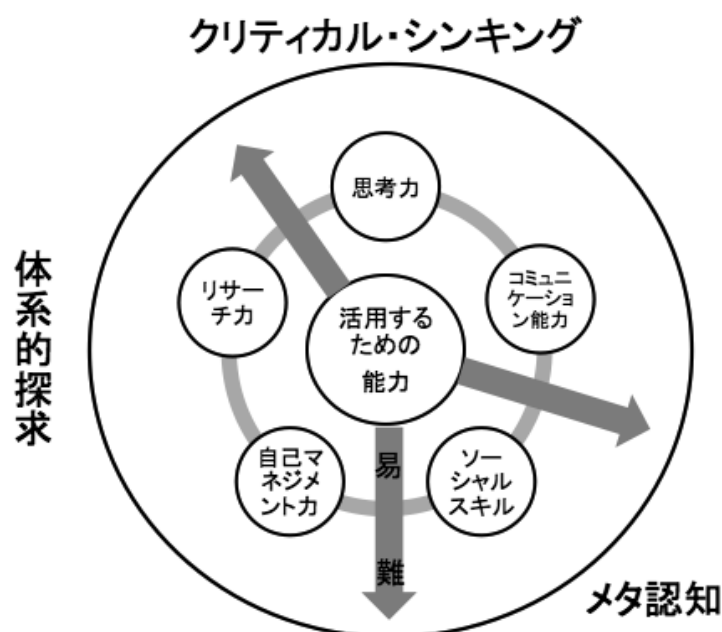


図4 「活用するための能力」の順序性

第4章では、教育プログラムの評価に焦点を当てて分析した。第1節では、プログラムで示される評価の考え方について、国際バカロレアのプログラム全体に共通する「評価原則」と、それを根底として、各プログラムの特色やステークホルダーのニーズに対応し



つつ作成された「評価システム」について確認した。ここから、国際バカロレア独自の理論に加えて、各ステークホルダーのニーズ（世界各国の高等教育機関等）に応じたシステムを構築するため外部評価の導入を行っていることを確認した。その背景には、評価に関する相反する二つの理論をいかに融合するのかという国際バカロレアが抱える課題が垣間見えた。すなわち、国際バカロレアの理念「学習者中心の理論」にも通じる「生徒の学習支援を促す評価」の重視と、生徒の出口保証につながる「ディプロマ資格（大学入学資格）」の発行するために重視される、資格の客観性・妥当性・信頼性の原理である。そこで、国際バカロレアでは各プログラム（PYP、MYP、DP）の目的に応じて、学校内で完結する評価と第三者機関としての学外者にその客観性・妥当性・信頼性を証明する評価の組み合わせをおこなっていた。資格の付与に直結するディプロマプログラムでは、生徒の発達に応じた評価として質的評価（振り返りシート、パフォーマンス評価等）を実施するため、①「評価目標・基準／規準」の作成、②外部評価機関制度の設置、③高い専門性を持つ教員養成・評価者の育成、という制度体制の整備・人材育成の開発をおこなっていることを確認した。評価原則を反映した教科「IB 文学」の「評価目標・基準／規準」を分析した結果、教科学習に関係する「言語学」や「文学」というに加え、学際的学習に必要な「アカデミック・スキル」、さらに、学際的学習を発展させるための「グローバルに活躍するために必要な概念」が含まれていることがわかった。さらに「IB 文学」試験問題と評価基準／規準の分析からは、行動を促す「指示語」の導入によって、「活用するための能力」の到達状況が確認できるような文言が示されていた。さらに、態度に関する文言は、第1章で確認した通り「理解の6側面」との類似性で確認した用語を通して「評価基準／規準」に内包されていることを確認した、例えば、「IB 文学」の「評価基準／規準」の観点に挙げられる「振り返りの記述を満たす要件」とは、コンピテンス「探求するための態度」における「学習に必要な態度」、「理解の6側面」における「(省察的な)自己認識」項目と高い類似性をもつ。こうした類似性は、国際バカロレアの教育目標と教科学習を実践としてプログラムに組み込み強く結びつけていると指摘することができる。以上から明らかになったことは、第1章で分析した教育目標としての「探求学習の、他者と関わるための態度」、第2章で明らかになった国際バカロレアの「教育内容」と第3章で明らかになった「教育方法の内容(身につけるべきスキル)」が、各教科の「評価基準／規準」に包括的にバランス良く組み込まれていたという点である。各教員および各学校の自由裁量を多くもつ国際バカロレアの教育プログラムであるが、各教科に関するガイドと「評価基準／規準」に確

認められるような明確な基準の設定によって、学校・教員・生徒に目指すべき学習達成基準を示すことによりカリキュラムの目標から成果までに一貫性を示すとともに、ディプロマプログラム終了時点としての最終ゴールを示していることを指摘できる。このような構成とは、評価研究の文脈によると「目標に準拠した評価」として位置付けられているだろう。

「目標に準拠した評価」は、欧米では「規準に準拠した評価〈**criterion-referenced assessment**〉」と呼ばれている。明確な評価基準／規準に基づき教育実践を展開する国際バカロレア教育プログラムは、まさにこのシステムに該当するといえる。

第5章では、教育プログラムを支える国際バカロレア機構の制度体制について、「教育の質」の維持に着目し概観した。「質の保証」という言葉は、近年、日本の高等教育改革で盛んに叫ばれている言葉である。第5章では、第一に、国際バカロレア認定校の認証プロセス、第二に、「プロフェッショナル・ディベロップメント」と呼ばれる教員養成（研修）制度・証書付与及び管理、評価の質保証サイクルに注目した。国際バカロレアの教育プログラムを機能するためには、第1章から第4章で確認したように、明確な学習達成規準と教育目標、教員と学習者を導くガイドが重要な道標とされていた。しかし、それだけで、教育システムが運営しているとはいえ、第5章のインタビュー調査でおこなったように、理念、人材、環境整備等要件を満たすことが必要な認定校となるための認証システムや、カリキュラムマネジメントや評価トレーニングを受けた専門性を持った教員の研修システムの体制の重要性が指摘できる。国際バカロレア機構が運営するためには、修了者の質の保証をおこなうためには、同時に、教育・評価・学校自体の質を保証する必要がある。調査の結果、機構は、定期的な学校および教員に対するチェック（点検）機能を有しており、点検によって、過不足が明らかになった場合、それに対して対応することが求められていた。国際バカロレア機構の組織の役割とは、認定校の活動が適切に機能するように体制をサポートすることである。本章の分析から見てきた機構のサポートとは、すなわち、各側面における明確な水準の設定し、それを理解し達成するために必要な学びの場の機会を広く周知し提供すること、それを適切に行っているか、確認し助言を行うことであった。以上から、教育プログラムの構造に加え、それを運営させるためのサポート体制の確立とその重要性を指摘した。最後に、インタビュー調査から、こうしたサポート体制および基準に関して、賛否両論の多様な意見があるが確認された。すなわち、世界中で展開する国際バカロレアにとって、カリキュラムの柔軟性や多様性への対応は目指すべき理念である。一方で、グローバル化に進展によって大きく広がりを見せる国際バカロレアにとって、客

観性、妥当性、信頼性の確保や要望はより一層求められるようになっている。このように、さらなる基準の明確化を求める人々とさらなる柔軟性を求める人々のせめぎ合いがおこなわれている。国際バカロレアの教育システムとは、世界中から多様な意見が寄せられ、常に現在進行形での葛藤を抱えながらも、それに答える形で変容し理念・目標に向けて動き続けている。このシステムが西欧型なのか、国際型なのか、ポストモダン型なのか、結局のところ、国際バカロレア機構内部にも分からないのが現状ではないだろうか。

## 本研究の成果

本研究全体から得られた知見として、2点挙げられる。1点目は、コンピテンスという知識・技能・態度を含む総合的能力が、国際バカロレア教育プログラムに一貫して、バランスよく組み込まれていた点である。コンピテンスの重要性が叫ばれる一方で、認知・非認知的能力の両方を含むコンピテンスをどのように中等教育段階のカリキュラム内に組み込み、実践し、評価するのかという一連の流れについては、これまでの研究では明らかにされてこなかった。本研究の分析では、国際バカロレアの理念と教育目標の一貫性、教育目標の分析から4領域のコンピテンス（群）を検出した。これらのコンピテンスは、教育内容・教育方法・評価方法を示したガイドと評価基準／規準に構造的に組み込まれており、カリキュラムの一貫性、すなわち、教育目標から教育成果（学習達成基準）の一貫性を支える軸として存在していた。以下では、教育内容に関わる基準、教育方法に関わる基準、教育評価に関わる基準について、それぞれの特徴について確認をおこなう。

教育内容で設定される基準とは、国際バカロレア全体として重要視とする概念（例えば、グローバルとローカルに関わるテーマ、異文化に関するテーマ）、各教科で必要とされる概念（文学であれば、文学のジャンル・形式、作者について、時代について、表現技法等）、大学に進学するうえで必要となる学術的なスキル（例えば、アカデミック・スキル、研究・実践の方法等）、教育プログラムに関する内容（例えば、必要時間数、課題・試験について、評価の方法）、学生生活一般に関すること（例えば、時間マネジメントの方法等）が挙げられる。国際バカロレア機構からのガイドでは、こうした概念を扱うことの指示はあるものの、実際にどのような教材を使うのか、いつ、どのような形で（修学旅行や文化際・体育祭、各教科内学習）でおこなうかは、学校側ないし担当教員の裁量に任されていることが

特徴である。教員らは、必要な要件が記されたガイドラインに沿って、適宜自ら企画・立案するという彼らの裁量によって実施していた。教育内容に係る基準は、すなわち、カリキュラムのうち教える範囲（スコープ）に相当する。

一方、教育方法で設定される基準とは、「学習の方法 (Approaches To Learning : ATL)」と「指導の方法 (Approaches To Teaching)」の理論がそれに相当する。「学び方を学ぶ」、「体系的な探究」、「批判的思考」の3点を重視する理論は、教員が教育内容とは別に学習者へ対して能力を身につけさせるうえで大きな役割を担っている。例えば、学習の方法 (ATL) では、思考力、コミュニケーション能力、ソーシャルスキル、自己マネジメント、リサーチ能力の5つのスキルを各教科実践に折り込み指導書を作成することが求められる点に特徴がみられた。教育方法のため設定される基準とは、国際バカロレアがおこなう教育の基本理論「探究→行動→振り返り」の学習サイクルを発展させるために設定される能力の明確化であるといえよう。しかし一方で、能力開発の実践の多くは各教員の裁量に委ねられている。授業参観やインタビュー、試験問題の分析からは、生徒の「批判的思考」等を涵養するためには、どのような「問い」を設定するかが重要な点であることが確認された。すなわち、カリキュラムのうちどのように教えていくかの手順（シーケンス）は、教育方法の基準によって設定されていること分かる。

教育評価の基準とは、理念および教育目標（「IBの学習者像」）や各教科で示させる教育目標・評価目標に対応するようにルーブリックとして設定されている。ルーブリックの観点は、教育内容の基準や教育方法の基準とも対応しており、概念と認知能力およびスキル獲得状況について測定できるようにマトリックスの構造を持っていた。特徴的な点は、教育プログラム全体・各教科・各課題の全てにおいて、最初から指導の手引きおよびルーブリックにて示されている点である。これは、教員・学習者共に同じ状況であり、学年が低い場合は、教員のマネジメントで基準に応じて学習進行をおこなうが、状況を理解できるようになる高学年および最終試験受験前には、生徒本人がどの基準まで達成すれば、どの程度基準を満たす必要があるのかを理解し学習できるようになる点にある。もちろん、学習達成基準を満たすため、学習する順序や教えるレベル段階について2年間ないし、中等教育プログラム (MYP) も含めると7年間を使ってクラスメンバーや各生徒の状況に応じて設定するのは教員の仕事となる。すなわち、教育評価の基準とは、国際バカロレアの「学習達成基準 (スタンダード)」を示しており、それを示すルーブリックには、教育内容の基準と教育方法の基準の両方が、マトリックスのように組み込まれて作成されている。

さらには、本研究の分析で分析軸とした「コンピテンス」が、各教科（本研究では「文学」）の教育目標および評価基準のなかに内包されていることを確認したことも付け加えておきたい。以上から、教育目標と学習成果（ディプロマ資格取得状況）の繋がりについて、理論的構造上、一貫性をもつ教育システムとして各要素がそれぞれの意味をもち、関連し合い機能していることを指摘したい。

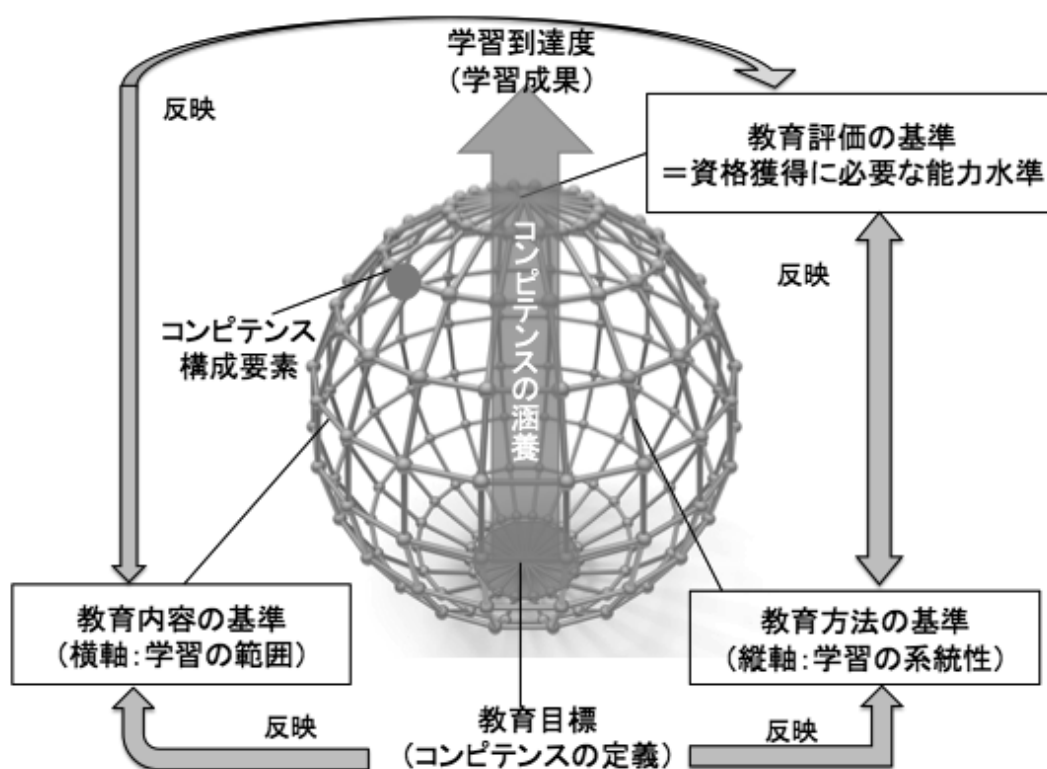


図5 国際バカロレア教育プログラムの構造的基準

本研究から得られた2点目の知見として、前述したような特色を持つコンピテンス・ベース型カリキュラムを運営するためには、各学校の教育プログラムも含めたその他環境整備・人材養成とそのサポート体制の整備が挙げられる。国際バカロレア調査から、機構では、学校および教員の質を保証するため、計画（Plan）、実行（Do）、点検（Check）、A（Action）のPDCAサイクルが整備されていた。特に特异的であった点は、点検システムである。例えば、国際バカロレア認定校になるためには、哲学・理念に始まり、組織に関する事柄、カリキュラムに関する事柄、生徒に関する事柄についての基準作成から環境整備に至るまで、国際バカロレアの教育をおこなうために重視される基準を満たす必要があ

る。そして、無事に認証を受けた後にも、機構から送られてきたスタッフによる定期的な点検が行われる。その結果は、学校の解決すべき事項として提示されることとなる。注目すべき点は、一点ずつ厳しい項目を設けていくという基準ではなく、大別された項目を基準として、各学校に所属するコーディネータを中心として各教員らと学校にとって何を重視しどのように対応していくのか議論を行いながら、項目を満たしていくというプロセスを重視している点にある。

教員については、教師作成の試験や評価に関する文書「モデレーション」の実施や機構による学習者の評価に対するチェック機能という二重の点検システムをもっている。それに対応する策として教員に対して「専門職開発（教員研修）」の機会が提供されているが、その内容は、ティーチングスキルに加えて、評価スキルおよびカリキュラムマネジメントのスキルも必要とされており、極めて高度な教員の専門性が求められる。そのため、前述したように、点検システムの実施は、教員にとって、担当する生徒を最低限の学習到達基準へ導くよう努力する駆動元であり、その結果、教職の専門性の開発を促進していた。

教育プログラムの構造が学習者を教育目標／学習達成基準への到達を目指した「学習者の質」を保証するために開発されていたのに対して、カリキュラムを運営するシステムに注目すると、「学校と教員の質」を保証するための仕組みが構造的な基準とともに張り巡らされていることに気づかされる。このようなカリキュラムとそれを支える教育システムの両方において理念・教育目標からの柔軟で一貫性のある基準の開発により、測定が難しいといわれる「コンピテンス」を授業実践で育成して、客観的な評価によって達成度を確認し、質を保証した資格によりその妥当性を証明するシステムを構築している。このような一貫した強固で一方では柔軟な基準のシステムによって世界各国に普及し活用されていることを確認した。

以上を踏まえ、筆者の問題意識でもあった近年の教育改革、すなわち、「何を学んだか」という知識の習得よりも「何ができるようになったか」という知識の活用への教育の質的転換について言及した。「教育の質的転換」の一つ方法に見える国際バカロレア教育プログラムは、カリキュラム全体を通して探求型の学習スタイルで統一されている。その土地固有の知識・技術、その科目特有の知識・技術から、より自由に柔軟性を持たせるため、あらゆる壁を取り除く方法で形成され、学ぶ内容自体を各学校や教員に委ねる国際バカロレアは、国家的なカリキュラムと比較すると、多くの知識の獲得を学習者本人の中等教育段階終了後の「生涯にわたる学習」に委ねていることは否めない。しかし、その代わりとし

て、自分で調べ、論述し、議論する等、学習の方法の確実な習得を重視し、その達成状況を把握している。限りある時間の中で、どのような方法が中等教育段階の教育として適切であるのかは誰にも分からないのではない。しかし、「何ができるようになったか」というパフォーマンスの成果を重視した場合、それは自ずと、学習者の学習内容の範囲を狭め、音楽やスポーツ同様、パフォーマンスの質を高めるために学習者に繰り返しのトレーニングの必要性が喚起されることを理解しておく必要があるだろう。

## 今後の課題

最後に本研究で残された課題を挙げる。1点目に、カリキュラムの分析をおこなう際、コアからは、「知の理論 (TOK)」、教科学習からは「文学」のみになった点が挙げられる。本研究の目的がより広い視点から国際バカロレアの教育システム全体の構造を理解することに重きを置いたこと、そして、日本の教育実践との比較をおこなえるように日本語による授業を選択したものの、今後より詳細なカリキュラム分析をおこなう場合は、その他グループ2からグループ6（特に理系科目）を対象とした分析をおこなう必要があるといえる。

2点目に、分析に用いた資料の言語、特に翻訳の問題が挙げられる。本調査をおこなった期間は、国際バカロレアの一部日本語版（デュアル・ランゲージプログラム）が推進された時期と重なり、本調査で使用したガイドの多くが日本語に翻訳された。本調査では、国内で使用される国際バカロレアの用語に統一するため、日本語訳を使用して分析をおこなった。しかし、現段階発行されている翻訳では、機構の真意を理解することが困難なケースも多く、英語と日本語両方のガイドを読み比べることの重要性を認識している。時間の都合上、本調査では、ガイドブック同士の読み比べをおこなっていない。そのため、原著とのずれの可能性が否めない。この点についても、日本語へ翻訳されたガイドブック訳の精査同様、今後の課題としたい。

3点目に、前述したように、カリキュラムの効果検証が挙げられる。日本・海外での進められる学習成果の検証（アウトカムズ研究）を分析する際、修了生に対して大学進学後およびその後の成果について、「カリキュラム」とはどれだけの影響を及ぼすのか、または、及ぼさないのかという点は、今後、授業内容の選定や授業方法の工夫、カリキュラムマネ

ジメントを開発していく上で重要なエビデンスとなり得るのではないだろうか。今後、学校内部・外部における多様な研究成果の蓄積が行われていくことを期待したい。